真宗大谷派　東岳山
安泉寺

愛知県愛西市三和町中ノ割173-1
TEL: 0567(28)0001
Mail: dai5noro@gmail.com

登録してね

ANSENJI.AISAI

2025年
2月号
NO.167

泉
-IZUMI-

ー目次ー

表紙「除夜の鐘・餅つき」　野呂大悟
百折不撓「存在の満足2」　野呂美道
除夜の鐘・正月の餅　野呂美道
向かい風　野呂美道
どこに立っているか　野呂美道
永遠に生きる　野呂美道
それでも人生には意味がある5　勝田茅生
掲示板・お知らせコーナー
＊付録　ハザード便り

煩悩も　ずっと一緒に　年明くる

野呂　博子

百折不撓　「存在の満足２」

野呂大悟

前月号でプロジェリア症候群という病を患いながら、その病気と向き合い、「生まれ変わるなら、もう一度私が良いわ」と言葉を残し十九歳の若さでこの世を去ったアシュリー・ヘギさんの話を紹介いたしました。この話は、十二月に行われた報恩講にて北村師が法話で話して下さった内容です。その中でお伝えくださった「存在の満足」について。その内容を振り返ると、私の頭の中に「天命に安じて、人事を尽くす」という言葉が思い出されました。この言葉は明治時代に活躍した僧「清沢満之」の残した言葉。有名な、福沢諭吉の「人事を尽くし天命を待つ」とは、似てはいるけどかなり捉え方が違います。

ここで一つエピソードを紹介します。昔々に一休宗純という僧がいました。みんなが知る「一休さん」です。その一休さんが亡くなる直前、弟子たちに「もし、どうしようもならない時が来たら、この手紙を見るがよい。窮地を乗り越えるための秘策を書いておいた。」と言って息を引き取りました。その数年後、戦や飢饉、疫病が蔓延り、地獄のような日々が現実に起こり、いよいよ弟子たちは一休さんが残した言葉を思い出し、藁をもつかむ思いで手紙を開封すると、中には「心配するな。何とかなる。」と書かれていたそうです。この話は、私の好きなエピソードの一つ。先日も、仕事の部下から相談を持ち掛けられました。色々と不安を抱える気持ちに出来る限り寄り添いながら話を聞いているつもりではありましたが、その悩みに対して、上手いアドバイスも思いつかず、ふと「大丈夫だよ。何とかなる。」とお伝えしたら、部下からは、「みんな『どうしたの？大丈夫？』はあるが、『大丈夫！』はあまりない。でも『大丈夫！』の方が何だか安心します。」と思わぬ返事がありました。

「人事を尽くし天命を待つ」とは、結果を気にせず力を尽くせ、その先は天のみぞ知る。と理解しています。とはいえ、「ここまで頑張ったから良い結果でありますように」という期待も込められている。というか、良い結果を求めるが故に人事を尽くすのだともとれる。もしも、悪い結果であれば落胆し、こんなに頑張ったのに…。と。これは結果により変化する「状況の満足」でありましょうか。

逆に「天命に安じて…」は、どのような境遇であっても、それは我がはからい（自らの力）では超えられない（変えられない）ものであると受け止めて（自覚して）、精一杯生きれば、おのずと結果は導かれる。だから心配はしなくてもよい。ということであり、いかなる状況や結果でも左右されることのない（不変的）「存在の満足」となるのでしょう。

アシュリー・ヘギさんは生まれ変わって、それが今の私と同じであっても違ったとしても、それはそれ。どんな状況であってもどんな境遇であったとしても、私の力では及ばないことに執着をせず、与えられた命を懸命に生きることが出来るだけで、それはとてもハッピーなことなのよ。とメッセージを届けてくれていると思います。

にもかかわらず、私も含めて多くの人は自らの境遇や状況に不満を漏らし、変われるものなら変わりたいと常に誰かと比べては、羨んだり、こんなハズじゃないと恨んだり、妬んだり、自慢したり、優劣をつけたりとまさに忙しなく生きています。私も三日間、いや一日だけでよいので大谷翔平になりたいと何度も思いました。そのような生き方は、常に何かに不満を感じ、不満を「状況の満足」で覆い隠す。しかし、またすぐに不満が生まれるという、無限のループに迷い込んでいるような状態でありましょう。要は、１億円欲しいと願い、念願かなって１億円が手に入ったならば、次は２億円欲しいと願うことと同じです。常に満たされることのない強欲さは、まさに苦しみの人生と言わざるを得ません。

仏教の本質は「抜苦与楽」。苦しみを抜き安楽を与えることであるならば、私たちはアシュリー・ヘギさんの生き様やダウン症の方々の人生の捉え方から多くのことを学ぶべきなのでしょう。そして、「天命に安じて、人事を尽くす」ことが私という存在に満足する唯一のことではないでしょうか。

除夜の鐘と正月の餅つき

野呂美道

◎表紙の写真を見てほしい。去年の大みそかの鐘撞き風景。何と今までで最高の人が集まった。おそらく百人は超えていただろう。◆孫の友人と親、私の関係者、息子の仕事関係、その他に、お顔を存じ上げない方々も沢山参加された。用意したぜんざいが底をついた。撞木が例年のごとく破壊された。◆習字教室を開いている弟が、今年は言葉を書いたキャンドルを飾ってくれた。親への感謝の言葉が多く、わざわざ見に来てくれた家族も多かった。◆とにかく、本堂は人人人でごった返した。それぞれが久しぶりに会った友人たちと懐かしそうに話を続けた。私は被災地の人達と、ボランティアの人たちを紹介し合い、つないだ。◆人が集まることはコミュニケーションが深まるということ。話し合う中で、何かが繋がる。ほんとうに不思議なもので、素晴らしいひとときだと思う。◆準備は大変だったが、大いに手ごたえのある時間だった。仏教伝来以来、お寺に人が集まるというのは当たり前のことなのだ。また、お寺とは人が集まってくる場所でなくてはならない。大勢の人達で新年が祝えて、これほど嬉しいことはない。

◎翌日は、異例の餅つき大会を催した。お隣の家にナンドくんというスイス人がホームステイをしている。彼は高校生、その家の同級生と共に高校に通っている。◆十か月以上も日本に滞在する予定だ。彼は何でもおいしく食べ、何でも経験する。報恩講の五色幕を張る手伝いもしてくれた。そして、是非日本の餅つきを体験したいと言っていたので、急遽元日に餅つき大会を計画した。倉庫の奥に数年眠っていた臼と杵・せいろなどを点検し、当日に備えた。◆たくさんの参加者があり、餅つきは大成功！　つきたての餅を、小倉あん・きな粉、砂糖醤油、大根おろしなどでくるんで、その場で食べた。つきたての餅はしっかり噛み応えがあってうまい。ナンドくんは「美味しいです！」を連発。除夜の鐘と合わせて、日本の文化や風習や味を満喫してくれたことだろう。

◆大晦日からお正月まで休むことなく行事が続き、私たちお寺のスタッフは疲労困憊。だから元日の夜は爆睡した。◆でも私は翌日の二日にはいつものように朝四時半に目を覚まし、お仏飯を炊き、お朝事（勤行）後、お鐘を撞いた。体調はすこぶる良い。新年早々やる気が体中にみなぎってくるのを感じた。

正月の餅つきの風景

◆スポヂカラという番組で、北海道下川町のジャンプの話題を取り上げていたので紹介する。人口３００人の町が６人のオリンピック選手を輩出した。この町の奇跡の物語を知ってほしい。◆基幹産業の林業が衰退し、町はさびれた。何とか町おこしを、という官民の努力で、それまで冬の子どもたちの遊びで行われていた、ジャンプ競技を町の目玉にしようと考えた。町営のジャンプ台があったので、ここで選手を育成するプロジェクトが立ち上がった。◆やがて二人の選手、岡部と葛西が頭角をあらわし、日本を代表するジャンパーとなった。リレハンメルオリンピックで、団体銀メダル、葛西はソチオリンピックで個人銀メダルの成績を収め、二人は下川町のヒーローとなって凱旋した。◆葛西は家が貧乏で、先輩のお下がりの服を頂いて強くなった。葛西の言葉「ジャンプは向かい風じゃないと浮いて飛んでいけない。逆境が来たら今がチャンスと思っている。」彼は５１才となった今でも現役のジャンパーで、ギネスブックを自ら更新している。◆町の唯一の下川商業高校では伊藤克彦コーチの指導を受けて、着々と若手が育っている。伊藤大貴、伊藤有希、岩崎里胡などの選手が活躍するようになった。寮生活を送る斎藤優は東京育ち、ホームシックになった時は、地元の里親のような夫婦のもとで、愛情をこめて育てられている。「東京生まれの下川っ子」を宣言しているほど。◆当時の近藤八郎教育長がジャンプ留学の制度を作り、町中の人達が、留学生を育んでいる。ジャンプ台に雪が積もると総出で整備をし、遠征用のマイクロバスは、寝られるようにお座敷仕様の改造もした。◆特産のトマトジュースを開発し、選手に飲ませている。この情報が世界に伝わり、中国、タイからもジャンプ留学生が寄宿している。葛西紀明選手が目標だそうだ。◆番組の最後に司会者が素晴らしいまとめをした。下川町で育ったジャンパーの背中には、町民たちで創った見えない羽が生えている。その羽で彼らは世界に羽ばたいているという。

◆私はこの町の起死回生の話を知って、思い当たることがあった。私の住む愛西市にも素晴らしい財産があるではないかと。何よりも全国有数の蓮根の産地であること。海抜ゼロメートル地帯で、全国的にも珍しい「輪中」が存在していること。今なお現役で稼働する、国の重要文化財「船頭平閘門」を持っていることなどだ。私の夢、愛西市を下川町に負けない世界一の素晴らしい故郷にしたい！　その道筋を見届けてから死にたい。

葛西選手
HPより転載

どこに立っているか

野呂美道

つかもと・まこと　1945年、石川県出身。同県珠洲市高屋町にある浄土真宗・円龍寺の第20代住職。「珠洲原発」建設の反対運動を28年続け、建設

新聞の記事より

◆ハザードだより8月号で紹介した、能登の僧侶・塚本真如さんの記事が新聞に掲載された。寺も庫裏も倒壊し、仮設住宅で暮らす夫婦はそれほど落胆していないと気丈にのべる。◆寺を維持していくのは門徒の人達。金銭・労力の負担を強いる。父から住職を継ぐときに言われた。「本当に坊主をやるんやったら、強い者の味方したらだめやぞ。それは坊主じゃないぞ。一番弱い人に寄り添うのが親鸞さんの生き方だ。」◆「人からいただいて、寺のもんは生きていける。だから自分を最優先に考えないというのが鉄則。」と語る。その立場で、彼は珠洲原発誘致反対運動の先頭に立った。◆「そもそも親鸞さんの教えを学ぶのに立派な建物はいりません。でも、門徒は寺を建ててくれ、と言う。もっと自分たちの生活を優先しろって、僕は言いたいんですが。」◆塚本さんの気持ちが痛いほど分かるからこそ、門徒は寺の復興を願う。本物の住職を支えようという門徒の心意気と、共に歩もうとする彼の立ち位置を確認し、心より感じ入った。

◆もう一人紹介したい人は、松浦・デ・ビスカルド・篤子さん。カトリック大阪高松大司教区、社会活動センターで難民救済に当たる。◆小学校の時、いじめを傍観していた時、教師に叱られた。「冷ややかな傍観者になるな！」祖父の死を経験する中で、「ただ、他者のために生きることが、人生の名に値する。」という格言に出会う。◆神学者、太田道子の講演会で「あなたはどこに立っているのか！」という第一声に感動し、彼女と行動を共にする。「救いとは？」という篤子の問いに対し、太田の厳しい言葉「幸福な私たちに救いはない。救われなければならないのは世の中で最も苦悩を重ねている人だ。もし、自分が救われたかったら、その人たちのあとからトボトボとついていくしかない。」谷間に置かれた人と共にいることが救いにつながるという。（まさに大乗仏教の菩薩行）◆その後、アフガニスタンから難民として来日、認定を受けた敬虔なイスラム教徒のユノスさんが、宗教の枠を超え、篤子さんに難民救済のためのSOSを送った。◆ユノスさんは言う。「神が私を遣わした。」◆二人の話を紹介した私は、仏教であろうがキリスト教であろうがイスラム教であろうが、究極の立ち位置はみな同じではないかという結論に達した。大きな力が身に満ちてくるのを感じ、生きている実感を味わった。

永遠（とわ）に生きる

野呂美道

一度きりの人生じゃない
他の人の心の中で第二の人生が始まるんだ
生きていること
それは困難のかべにぶつかり
それを乗りこえること
約束された死までの時間を
輝く時間にすること
死んでしまうこと
それは輝く人生を終え
他の人の心の中で
永遠に生きてゆくこと

◆右の詩は、30年前の阪神淡路大震災の追悼の会の時、小学6年生の女の子が詠んだものだ。震災後に詠まれた詩に感嘆する。◆米津夫妻は震災で漢之（くにゆき）君と深理（みり）ちゃんの二人の愛児を亡くした。遺品の中に漢之君のランドセルがあった。数年後、二人の子をもうけた夫妻の次男、凜（りん）君が小学校に上がる時、彼は自分の意思で亡き兄のランドセルを背負って通学した。凜君はお兄さんの分までしっかり生きて、自分の人生を切り開こうという決意のもとに、ランドセルと漢之君を背負ったと思う。◆ランドセルで思い出した。東日本大震災のあと、仙台の海辺にある海楽寺の次男、大友柊人（しゅうと）君も、何年も経ってから、封印されて当時泥だらけだったランドセルを、訪問した私たちの前で初めて開封してくれた。そして、高校生になって、初めて震災に向き合おうと、私たちにその当時の辛い体験を話してくれた。彼の語り部デビューの瞬間を私たちはランドセルと共に見届けた。◆二つのランドセルのエピソードを知って、私は震災を風化させずに、未来へとつなぐ大切な仕事があると痛感した。折りしも1月13日の夜9時過ぎに、ふたたび日向灘で地震が発生し、津波が押し寄せた。◆今回は東南海地震の臨時情報を出すに至っていないとその筋は伝えているが、安心してはいけない。以前のような買い占めは起こらないかもしれないが、気を付けなければいけないのは、「また、空振りだった。」という正常化バイアスに私たちが捉われていないかということだ。◆私は危機感を募らせた。早く対策を取らなければと強く思った。◆最後に、先ほどの米津凜君のお父さんの言葉を紹介してこの記事を終わろうと思う。「それでも人生は生きるに値するものだ。」◆次頁の連載としっかり繋がっている言葉だ。

ランドセルを開封する大友柊人さん

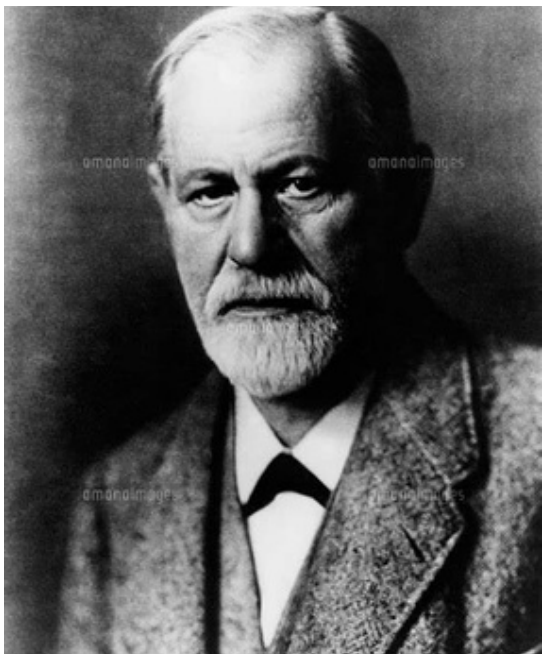
第1章「日曜生まれの子」その光と影3

◎哲学に傾倒した青春時代

◆思春期のフランクルは、時間のある時に一人で公園に行って哲学の本を読んだり、最近読んだ本について友人と討論したりしました。ことに古代ギリシャの哲学者、プラトンなどの本に夢中になったそうです。◆一時期は、ショーペンハウアーやニーチェに代表される悲観的な哲学に傾倒しました。「どんなに苦労しても人生に意味などない」といった否定的な人生観を伴う哲学です。◆幸い、フランクルが十五歳になる一九二〇年頃から、このニヒリズムに反論するように、人生に肯定的な「実存主義」が広がり始めました。この哲学は、「超越者とのかかわり合いが生きることに意味を与え、人間相互の純粋な出会いを可能にする」という前向きな思想で悲観主義を退けました。フランクル自身も、そのような肯定的な哲学のほうが自分のアイデンティティに合っていると感じ、ニヒリズムを克服することができたのです。

◎フロイトとの出会いと別れ

◆フランクルはウィーンで精神分析を実践していたジークムント・フロイトと手紙をやり取りするようになります。ある時、フランクルが「肯定・否定における顔の表情」について考察を送ったところ、フロイトから「国際精神分析雑誌に載せるべくはからった」と返事があり、びっくりしたそうです。◆しかし、当初、フロイトの精神分析を熱心に勉強したフランクルですが、二十歳の頃、その思想と決別します。詳しくは後にお話しますが、精神分析は、人間の行動原理を性欲や快楽で説明するものでした。フランクルは、それが人間の一面的な見方としか考えられず、納得できなかったのです。◆こうしてフロイトの精神分析に別れを告げたフランクルは、当時急速に名声を上げていたアルフレッド・アドラーの「個人心理学」を学ぶことにしました。ウィーン大学で精神医学を学ぶ少し前のことです。彼はフロイトの思想には批判的でしたが、彼の記憶力の良さで、フロイトという人間を最後まで尊敬していたそうです。（続く）



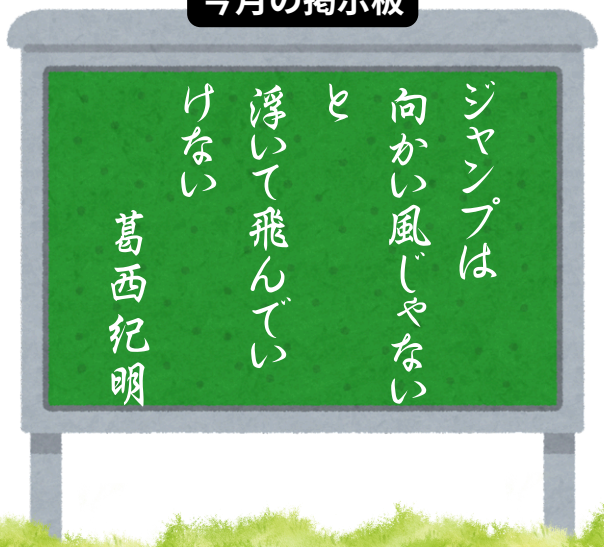
ジークムント・フロイト
国籍　オーストリア
1856年　ー　1939年
精神分析学の創始者

お知らせコーナー

2月の予定

大成講　一日（土）
別院募金　十二日（水）
写真クラブ例会　十五日（土）
文芸クラブ例会　二十日（木）

今月の掲示板



◆「逆境が来たら今がチャンスだと思っている。」という彼の思いは、私たちの人生の指針となるのではないでしょうか。

訃報

野村　滋さん　豊山町　享年七十四才
伊藤　正美さん　桑名市　享年六十七才

いずみのほとり（老僧）

◎除夜の鐘に合わせて、キャンドルサービスがありました。めいめいが思い思いの言葉を書いて飾りました。その中に「男気をありがとう」というのがあり、それは「勇気」の間違いだと分かりました。これが本当の「マヌケ」ですね。

◎社会福祉士の友人の話。貧困家庭にサプライズでクリスマスケーキを奮発して届けても、彼らは喜ばない。なぜなんだろう？　子供たちはケーキの箱を見てもそこに入っているものが分からなかったのです！　中身を見て誰もが歓声をあげました。そんな家庭がいくつかあるのです。

◎故人の伊藤正美さんは私と気が合いました。私が「日産ノートEパワー」に乗っていたら早速上級車種を買い、数年でさらにグレードアップした「オーラ」という新型に乗り換えたのです。奥さんとその車で日本一周の旅をするのが老後の楽しみだと言っていました。でも、彼は一足先にお浄土へ旅立ってしまいました。◆奥さんは、蓮ワークが得意で、床の間には沢山の焼酎の瓶の上に、色とりどりの蓮の花が飾ってありました。それらはすべて棺に入れられ、正美さんの旅立ちを祝福してくれました。

◎ついに老僧もコロナウイルスに感染しました。私が関わる行事はすべてキャンセル、しかし住職や坊守・前坊守たちがしっかりフォローしてくれます。有難いことです。